童話

王女の猫の話

――カレル・チヤペック――

東京女子高等師範學校教授　中野好夫譯

三

皆さん、この前には猫はそれは〳〵いろんな藝當が出來るといふお話をしましたネ、今度はも一つ別のお話を致しませう。ある時、王女樣に、「もしもし、王女樣、猫といふ獸物はいくら高い所から落つことしても、ヒョイと上手に足から落ちて、怪我なんぞするものぢやございません」、と申上げたものがありました。だもんで、王女樣はある日のこと、スーザンを捕へて、高い高いお城の屋根裏へ登つていらつしやいました。そして、無論ほんの試めしにやつて御覽になつたのでせうが、可哀相にスーザンを小さな窓からポーイと投り出しておしまひになりました。サア、大變だ。王女樣は大急ぎで窓から首を出して、誰れかのいつたやうに、ほんとうにスーザンが足から落ちたかどうか、御覽になりました。ところがそれは飛んだ大違ひで、スーザンは丁度その時窓の下を通りかゝつてゐた一人の男の丁度その頭の上にストーンと落つこちたのでした。生憎スーザンの爪がひどくその男の人の頭にひつかゝつたのかもしれません、それともすつかり面喰つてしまつたのでせう、――窓の上では王女樣が、王女樣の猫だよ、ソッとお前の頭の上に乘つけておくんだ、いゝかい、と心の中で思つてゐらつしやるうちに、その男は矢庭にスーザンを鷲掴みにすると、上衣の下に抱えこんで一目散に馳け出して、見えなくなつてしまひました。

サア、驚いたのは王女樣です、オイ、オイ大聲で泣きなが

ら屋根裏から王樣の處へ馳けていらつしやいました。『アーン、アーン、下を通つてた男の人が、妾のスーザンを盜つて行つちまつた、アーン、アーン』。

これをお聞きになつた王樣もすつかりお狼狽てになつて、『猫一匹はどうでもいい。だがあの猫はぢや、俺にこの次の王樣を連れて來てくれる約束ぢや。どにかくあれをなくする譯にはゆかない』。

王樣は大急ぎで警視總監を御呼びだしになりました。『實はな』、王樣は仰言ひました。『俺の黑猫を盜んで行つたものがある。なんでも上衣の下に匿して、向ふの方へ逃げ失せたといふ話だ』。

警視總監は三十分ばかりも眉毛をしかめてすつかり考へこんで居りましたが、やつと『陛下、委細畏りました、手前はたとへ警視廳、私立探偵、全陸海軍、全消防隊、全濟航艇、全航空船は申すに及ばず、占者、買卜者、その他國中のありとあらゆる人間、たとへ猫、杓子の手をかりましても、きつと陛下の猫を探しあてゝ御覽に入れます』。と申上げました。

で總監は早速國中で選り拔きの探偵を呼び集めました。皆さんは、探偵つてどんな人だか知つてゐますね。こつそり泥棒を搜してくれる人ですネ。私達と同んなじ服を着て、そして誰れにも氣づかれないやうに、いつも變裝してゐますネ。どんなことだつて見逃さない、なんでも探しだす、どんな泥棒だつて捕へてしまふ、そしてどんなことがあつても恐がつたりなんぞしませんネ。どうです、皆さん、探偵になるのは大變でせう。

サア、元のお話にかへつて、そこで警視總監は早速選り拔きの探偵を呼び集めました。鼻高君、足長君、眼鏡君、(この三人は兄弟でした)。それからイタリア人で惡狡い狐狸君、いつも陽氣なオランダ人のデブ君、ロシア人のノッポ君、始終小言ばかり言つてるスコットランド人のブツブツ君、そこで名探偵諸君は總監から二言三言事件の模樣を聞くと、すつかり呑みこんでしまひました。おまけに泥棒を捕へたものにはごつさり御褒美が出るといふのでした。

『占めた!!』狐狸君は大聲を擧げて飛び上りました。

『ヨーシ！』デブ君は愉快そうに申しました。

『フーム』、ノッポ君は口の中でうなづきました。

『成程』、ブツブツ君がみんなの後からボツンと附加へました。鼻高君と足長君と眼鏡君はだまつてたゞ顔を見合はせました。それから十五分ばかりもすると、鼻高君は上衣の下に黑い猫を抱へた男が市の大通りを歩いてゐるのを見つけました。三十分ほどたつと、足長君は、上衣の下に黑い猫を抱いた男が公園に現はれたといふ報知をとつて參りました。

そして一時間後には、眼鏡君がアタフタと馳けこんで來て、上衣の下に黑い猫を抱いた男が今丁度ある居酒屋でビールを飲んでゐるところだと申しました。そこで狐狸君、デブ君、ノッポ君、それにブツブツ先生を加へて四人の探偵は、待たせてあつた自動車に勢よく飛び乘つて、居酒屋へと急ぎました。

『諸君!!』現場へ著くと、狐狸君が申しました。『なにしろこういふ狡猾な犯人は一筋縄ではいけない、巧くコッソリ捕へてやらなければならぬて、そこで、諸君、まあ僕に任したまへ』。が實は狐狸君の腹の中は自分一人で褒美にありつかうといふのでした。

そこで狐狸君は早速綱賣り商人に化けて、居酒屋の中へ入つて參りました。成程、黑い服を着て、黑い髪、黑い髯をはやした、そして顔の蒼い、そして美しい悲しさうな眼をした見なれぬ男が坐つて居ります。『此奴だ、此奴だ』。狐狸君は即座にそう決めてしまひました。

『エ、御客樣』、狐狸君はモグモグ呟くやうに口を切りました。『私は綱賣りで御座います。この通り上等の綱で御座います、斷らうたつて斷れやしない。撚りがもどる？金輪際あるもんぢや御座いません、ヘイ。筋金入りでサネ』。狐狸君はそう言ひながら、綱を出してその男の前へ擴げてみせる。それからそれをほぐして兩手に持ちかへました。無論その間も油斷さへあれば、相手の男の手首にキリリと一縄かけて、そのまゝ縛り上げてしまはふといふのですから、一瞬だつて相手から眼を放すことはありません。

『綱なんぞに要はないよ』。相手の男はそういつたまゝ、指でしきりに卓子の上に何か書いてゐる樣子です。

『でもお客樣、まあ一寸御覽なすつて』、狐狸君はなほうるさく申しました。そして持つてゐる綱の束をドン〳〵解きにかゝりました。『ネエ、お客樣、一寸御覽になるだけで結構で御座いますよ。この長いこと、この細くて、しかも丈夫なこころを、エ、この眞白で、なにしろこてもの上等のお品で御座いますからね——アッ、オヤ、——畜生!!』突然狐狸君は驚いたやうに大聲を擧げました。『こりや一體ごうしたこいふんだ』、狐狸君はさつきから綱束を解して、自分の兩手に卷きつけてゐましたが、不思議、不思議、狐狸君の兩手は見る見るうちに綱に縛れて行つて、呆氣にとられて見てゐるうちに、今度は綱が自然に動き出しました。見るまにクルクルクルと狐狸君の身體にからみつく、からみついたと思ふと、これも自然に結び目が出來て、アッと云ふ間に反對に狐狸君の方がすつかり縛り上げられてしまひました。狐狸君は身體中から汗を流して唸つて居ります。でもまだ自分の力で遁れることが出來るつもりで、獨樂のやうにグルグル廻るやら、身體をあちらこちらクネクネやつてみるやら、地面を轉がり廻るやら、地團駄ふむやら、イヤハヤ大變な騒ぎです。それでもなほ狐狸君は饒舌りつづけて居ります。『ウーン——だがお客樣、！アッ、苦しい——ウーン——お客樣、ごうです、この長さは、丈夫さは、この彈力のあるこころは——ウーン！——上等の品ですぜ、お客樣——アーッ、苦しい、神樣!!』そして綱は狐狸君がもがけばもがくほど、强く身體に絡みついて、グイグイ緊つてゆくのです。おしまひには手も足もがんじがらめに縛られて、流石の狐狸君も到頭その場に打倒れてしまひました。

そして不思議な男は眉毛一つ動かさないで坐つて居ります。あの悲しそうな眼を一度だつて擧げやうともしないで、やはり何か卓子の上に書きつゞけて居ります。

一方外で待つてゐる探偵達は、狐狸君が一向歸つて來ないのが漸く心配になつて參りました。『ウム、ヨシ!!』ノッポ君は決心したように、一言そう言ひ殘すと、威勢よく飛びこんで參りました。四邊を見廻すと、——狐狸君はグル〳〵卷きになつて床の上に轉つてゐるではありませんか、そして見馴れぬ男が卓子に倚つかゝつて一心に卓子掛に何か書いて居ります。

『ウーム！』ノッポ君は唸りました。

『君、どうしたのだ』。見馴れぬ男は訊ねました。

『俺は貴樣を捕縛に來たのだ』。ノッポ君は嚙んで吐き出すやうに申しました。

しかし見馴れぬ男はほんの僅かチラとあの不思議なほど美しい眼を擧げたゞけでありました。

ノッポ君はアハヤ打つてかゝらんばかりに兩拳を振り上げたところでありましたが、その不思議な眼と眞向からぶつゝかるこ、突然何か不思議な氣味惡さを感じました。でノッポ君はそのまゝモジモジ兩手をポケットに收めてしまひました。『アノウ……君、だまつて靜かに隨いて來た方が好いやうだぜ。俺がこの手で一度摑まへたら、お前の身體の骨一本だつて助かりつこないんだからな』。

『本ホう、そうかねぇ』。見馴れぬ男は申しました。

『そうだとも』、ノッポ君は續けました、『俺が一つ貴樣の肩口でもポンとやつてみろ、お氣の毒だが、貴樣は一生跛だ。强力ノッポと云ふ綽名を知らないのか』。

『成程、それは面白い』、見馴れぬ男は申しました。『だが、力ばかりが能ぢやないからな。君は今何か喋舌つてるが、物は試めしだ、一つその君の兩手をポケットから出してみてもらひたいネ』。

ノッポ君はむしろ呆氣にとられました、そしてポケットから自分の手を出さうと致しましたが、ところがどうでせう。拔けません、どうしてもポケットから拔けません。右手をやつてみました——まるで根から生えたやうに緊くくつ著いて居ります。今度は左手——これはまたまるで手の先に何百貫の重錘（おもり）でもブラ下つたようです。ナニ糞!!これしきのことがなんだ、ノッポ君は心の中で申しました。しかし肝腎の手の方は押せども突けども、それこそどうとも動かうとは致しません。

『オイ、冗——冗談はよせよ』。ノッポ君は情無い聲を出しました。

『大したことでもないよ』。見馴れぬ男は一言低い聲で答へたまゝ、相變らず何か指先で書いて居ります。

ノッポ君がポケットから手を拔くのにタラ〳〵汗を流しながらもがいてゐる間、外では探偵君等が今度はノッポ君

まで歸つて來ないのにすつかりヤキモキして居ります。『俺が行く』。デブ君が決然と申しました、そしてまん丸い身體を轉がるやうに入つて參りました。四邊を見ると、――これはまた狐狸君は床の上にグル〳〵巻きになつて平太張つてゐる、ノッポ君はポケットに兩手を突込んだまゝ熊のやうにそこら中を跳ね廻つてゐる、卓子の向ふには見馴れぬ男が頭を垂れて、しきりに指先で何か書いてゐる。

『僕を捕へようといふんだネ』。デブ君が口を開くより早く、今度は見馴れぬ男の方から言葉をかけました。

『いかにも、御邪魔させていたゞきます』。デブ君はポケットから手錠を取り出しながら、ひごく鄭重に申しました。『恐れ入りますが、一寸その御手を拜借致し度いので御座いますが。ナニこの手錠を一寸かけさせて載きたいんで御座いますよ、へィ。まだ出來たばかりの新物で御座いましてな、この通り最上等の鋼鐵で、冷いやりと致しますぜ。それにこの通り見事な上等の鐵鎖りもついて居りますで、ィヤモウ、何から何まで一流の御品で、へ、、、、』。そう言ひながらデブ君は手錠をガチャ〳〵鳴らしてみせたり、まるで店の品物でも見せるように、兩手で玩具にしたりしてゐました。『何卒、御自分で御選り下さいますように』、デブ君はニコニコしながら申します。『手前共は一切御無理にとは申しませんので、尤もたゞ先樣でおいやだと仰言ひますようならば、そこは少々御無理を願ひますようなことにも相成りまするが、へィ、腕飾りとしましても誠に結構な品で、それにこの錠前などは特許品で御座いましてな、それはピッタリ合ひます、窮屈だとか、摩れるとか、そんな虞れは一切御座いませんので、へィ』。ところがいつのまにか、デブ君の方が眞赤になつて、やがて汗をタラタラ流しながら、まるで氣でも狂つたやうに手錠を兩手に急がしく持ち更へはじめました。『紳士方向きの、極く上等の手錠で――アッ、ッ、、、、ウーム――大砲の鋼鐵から製つたもので御座いまして、――ウーム、熱ィ!!ウーム――その何、何、何千度といふ――ウーム、糞!!――火、火、火の中で――熱ィ!!!――』デブ君は突然悲鳴を擧げるのと一緒に肝腎の手錠を床の上に投り出してしまひました。氣の毒に、そうでもするより仕方がありませんでした。何故つて、皆さん、

何故デブ君は兩手で頻りに手錠を持ち更へて居たのでせう、手錠は自然に眞赤に燒けて來つて、床の上に落ちるこ、みるみる大きな燒穴をこさへて、危ふく大事になるこころでした。

家の中ではこんな大騒ぎが起つてゐる間に、外ではブッブッ君、今度は誰一人歸つて來ないのでいよ〳〵心配になつて參りました。『ヨシ來た』ブッブッ君は思切つて、ピストルを取出して家の中へ入つて參りました。四邊を見廻すこ——これはまた、濛々ここもつた煙の中から、デブ君が痛さうに兩手をブーブー吹きながら跳ね廻つてゐる、ノッポ君はノッポ君で、ポケットに手を突込んだまゝしきりにもがいてゐる、狐狸君は床の上にグル〳〵卷きで唸つてゐる、そして卓子の向ふには見馴れぬ男が頭を垂れて何か卓子布の上に一心に書いてゐます。

『オイ！』ブッブッ君はピストルを身構へたまゝ、ヅカヅカこ進み寄つて申しました。

見馴れぬ男はクルッここちらを向き直るこ、靜かに例の涼しい考へ深さうな眼を擧げました。その落著き拂つた眼に打突るこ、ブッブッ君は何か自分の手が自然に慄えだすやうな氣がしました。でもやつこ氣をこり直して、出來るだけ相手の近くへ寄るこ、いきなりその男の眼こ眼の間、前額の眞中をめがけて、いきなりバンバンバンこ六連發を立續けに發射しました。

『それでお終ひかネ？』見知らぬ男は訊ねました。

『いゝや、まだゞ』。ブッブッ君はそう答へるこ、素早くもう一挺のピストルを取出して、前額めがけてもう六發打放しました。

『お終ひかネ』。見知らぬ男はまたしても申しました。

『ウン』、ブッブッ君はそう答へたまゝ、思はず遁げ出して、兩腕を緊く組んだまゝ隅つこの腰掛の上にペタリこ坐つてしまひました。

『そうか。ぢや、勘定をしよう』。こ言つて、その男はコップの中に十錢白銅を一つ、チリンこ落しました。奥からは誰一人出て參りません。皆んなピストルの音に魂消てしまつて屋根部屋の中に隱れてしまつてゐたのです。見知らぬ男は卓子の上に十錢白銅を一つ置いたまゝ、探偵達に輕

く會釋するこ、そのまゝ靜かに出て行つてしまひました。

丁度その時です。鼻高君が第一番目の窗から、足長君が二番目の窗から、そして眼鏡君が三番目の窗から、ヒョイ、ヒョイ、ヒョイこ顔を出しました。そして鼻高君がまづ室の中に跳りこんで參りました。『諸君、諸君』鼻高君は申しました。が『犯人は何處だ、犯人は』。こ言ふが早いか、そのまゝお腹の底から吹き出してしまひました。足長君が二番目の窗から跳びこんで參りましたが、これも笑ひころげながら、『ナンダ、狐狸君が床の上を轉がり歩いてるぢやないか』。こ申しました。

眼鏡君も三番目の窗から跳びこんで參りましたが、デブ君を見るこ、『ホ、ウ、君ひどく難儀のやうだネ』。

こその後から鼻高君が、『ブッブッ君はまるで借りて來た猫だぜ、今日は』。

そして最後に足長君が申しました。『それにノッポ君もすつかりしよげちまつてるネ』。

それでも狐狸君はやつこ床の上に起き上るこ、痩我慢をはつて申しました。『諸君、諸君、こいつは容易ならぬ事件だ。彼奴は指一つ動かさないで僕をふん縛つたんだからな』。

『それから僕の兩手をポケットの中に膠づけにしちまつたんだからな』。ノッポ君は唸るやうに申しました。

『それから僕の持つてる手錠を火のやうにしちまつたんだからな』、デブ君がつくづくこぼしました。

『そんなことは何でもない』。こブッブッ君が附加へました。『僕は彼奴の頭の中へ彈丸を十二發打込んでやつたんだが、ケロリこしてやがるんだからな』。

鼻高君こ足長君こ眼鏡君はお互に顔を見合せました。

『こいつはどうやら――』鼻高君が眞先に申しました。

『――あの泥棒奴は――』足長君が續けました。

『ひよつこするこ、魔法使だぜ』。こ眼鏡君が結論をつけました。

『だが諸君、安心したまへ』。またしても鼻高が申しました。『彼奴はうまく僕等の罠に陷つた。僕等はネ、兵隊を一千人ばかり連れて來たんだ――』。

『――この家をすつかり押取りかこんで――』足長君が申

します。

『――蟻の這出る隙だつてありやしないや』。眼鏡君が揚揚と申しました。

丁度その時でした、家の外でまるで百雷の落ちるやうな一齊射撃の鐵砲の音が致しました。

『やつた!!』探偵達は異口同音に叫びました。

とその途端に人口の扉が勢よく開いて、隊長が氣色ばんで馳けこんで參りました。『報告致します。吾々は當家屋を包圍致しまして、蟻一匹這ひ出でる隙のないように嚴命致して置いたのでありますが、丁度唯今、やさしい眼をした一羽の白鳩がこの家の中からバタ〳〵と飛び出して、拙者の頭の周りをグル〳〵飛ぶのであります』。

『エエッ!!』探偵達は一齊に叫び聲を擧げましたが、プッブッ君だけはたゞ一言『成程』、と深くうなづきました。

『で拙者は劍を拔いて唯一刀に眞二つに鳩を斬つて捨てました』。隊長は報告をつゞきをはじめました。『部下の兵士等も名々この鳩をねらひ打つたのであります。見る見る鳩は何千といふ小さな紙片のやうになつてケシ飛んだのでありますが、今度は、その一片一片が忽ち眞白い蝶になりまして、そのまゝ飛び去つてしまひました。吾々は如何致したものでありませう』。

鼻高君はキラ〳〵眼を光らせました。『よろしい、豫備軍を併せて、全軍を召集する、そして直ちに世界中に派遣してその蝶共を捕へさせるのだ』。

で結局その通りにすることになつたのでありますが、その御蔭でそれはそれは素晴らしい蝶々の標本が集まりました。それは今でも博物館に陳列されてありますから、皆さんはロンドンへ行つたならば是非一度見て來るがいゝと思ひます。

で丁度その時足長君は他の探偵等に申しました。『諸君、サア君達はもう用事はない。僕等は君等とは別に方法を考へるんだから』。

そこで仕方なく狐狸君、デブ君、ブッブッ君、ノッポ君等はシホシホと空手で歸つてゆきました。

さて鼻高君、足長君、眼鏡君の三人は一體どうしたらあの魔法使ひに勝てるだらうか。額を集めて長い長い相談に

かゝりました。あれやこれやと計略を議論してゐる間に、三人は二百斤のタバコを喫ひ、その界隈の飲食店の食物といふ食物をすつかり食べてしまひました。

それでも三人の相談はまだ何一つ纏まりませんでした。到頭眼鏡君が申しました。『諸君、それぢや駄目だ。少し新鮮な空氣を吸はなくちやあ』。

そこで三人はやつと家を出ることになりましたが、ふと一足家を出ると、これはまたどうでせう、そこには目指す敵の魔法使ひがケロリと立つてゐるではありませんか。しかも魔法使ひは腰を下したまゝ、お馬鹿さん、私をどうするつもりだと言はないばかりにニコニコ眺めてゐるではありませんか。

『居たぞッ!!!』鼻高君は思はず大聲を擧げました。そして躍りかゝつてムヅと肩口をつかんだのでありますが、その時早く、魔法使ひの身體はみる〳〵小さな銀色の蛇に變りました。そして鼻高君がハッと驚く拍子に思はず地面へ落つことしました。それと見ると足長君は素早く走りよつて、上衣を脱いで蛇の上から投げかけましたが、今度はみるみる一匹の金色の蠅になつてボタンの穴からツーと飛んで遁げました。と眼鏡君がすかさず跳りかゝつて、帽子でパッと伏せこみましたが、またしても魔法使ひの蠅は小さな一條の銀色の流になつて帽子と一緒にヨロ〳〵と流れ出しました。あはてた三人が大急ぎでコップをとりに家の中に馳けこんでゐる間に、銀色の流れはスル〳〵とみるまに傍の大川の中に流れこんでしまひました。だから皆さんが今でも大きな川の縁に立つて御覽なさい、水面が折々それは〳〵美しい銀色に光つてゐることがありませう。あれは川が大變機嫌のよい時で、あの魔法使ひのことを思ひ出してゐるのです。そして川の水はあなた方がうつとりするやうなかすかな音をたてゝ、そしてキラキラ日に輝きながら流れて居ります。

さて足長君と鼻高君と眼鏡君はしばらく川岸に立つて、ハテどうしたものかとぼんやり水の面を眺めて居りました。すると水の中から一匹の銀色のお魚がキラキラ光る黑い眼をしてヒョックリ顏をもたげました——それは、いふまでもない、あの魔法使ひの眼でありました。早速三人の

探偵は釣竿を買つて來て、釣をはじめました。今でも皆さんは、大きな川に三人が船を浮べて、釣竿を垂れて、一日一言も言はないで啞のやうに釣をしてゐるのを御覽になるでせう。あの人達はこの黑い眼をした銀色のお魚を釣るまでごうしてもやめることが出來ないのです。

其のほか幾人もの探偵がこの魔法使ひを捕へようとやつてみましたが、みんな無駄でした。探偵達が自動車で捕へに出懸けると、森の軟い若芽の間から突然牝鹿が一匹ヒョッコリと首を出して、物珍らしそうなやさしい黑い眼をしてみんなをじつと見詰めて居りました。探偵等が飛行機で追掛けると今度は後から大きな鯊が隨いて來て、鋭い誇らしげな眼付でいつまでもいつまでもみんなの方を見詰めて居りました。舟で駛つてゐると、一頭の海豚が波の間から頭をもたげて、利口さうな澄んだ眼をじつとこちらに向けて居ります。書齋の中で探偵の人達が思案に耽つてゐる時でさへ、卓子の上の花がいつの間にかニコニコ不思議そうに人々の顏をのぞきこんで居りました。警察犬さへ折々突然眼を擧げて、いつもとはまるで違つた人間のやうな美しい瞳をぢつとみんなの方に向けて居りました。到るところから魔法使ひは探偵達をぢつと見まもつてゐるやうでした、そして今じつと見てゐるかと思ふと、すぐ消えて居ります。あゝ皆さん一體ごうしたら捕まるのでせう。

（つゞく）

爪人形

子供を背中から抱くやうにして、爪に、—拇指にでも、人さし指にでも、—筆で顏をかいて御覽なさいませ。ほんのりとあかい櫻貝のやうな爪に、ちよん、ちよん、ちよんと目鼻をつけますと、可愛いゝものです。

これは、或る雨のふつた日に、お向ひの主事室に遊びに行つた子供が、倉橋おぢちやんにかいて頂いて、大事さうに指をかゝえて歸つて來た事がありました。それから覺えた藝當で、その指にふらんすちりめんの小切れで、一寸頰かむりをさせた時は大さはぎでした。

とても子供が喜びますよ。

（よしこ）